岩手日報　平成２７年９月１５日（火）
※この記事は岩手日報社の許諾を得て転載しています。

花北青雲打線が全開

高田、終回に意地の一発

◇2回戦▽第1試合

花北青雲　10230030211
高田　01300000015

（花）野中、高橋佑－高橋大
（高）千田、水野－村上諒
本佐々木貫（高）
三藤原、佐藤（花）

短打重ね大量点

花北青雲

18安打のつるべ打ちで11点。11安打でコールド勝ちした1回戦に続き、花北青雲打線が火を噴いた。先発には今夏のレギュラー7人が名を連ね、沢田靖永監督が「夏の貯金が残っているから。新チーム同士なら、ある程度打てる」と言うのもうなずける。

2点を勝ち越した三回、すぐさま逆転されても点の取り合いなら負けない。直後の四回、野中大輔（2年）が高めのスライダーを見逃さず、右中間へ逆転の2点適時打。この日4安打を放ったエースは「投球が駄目な日はなぜか打てるんです」とバットで取り返した。

その上を行ったのが3番佐藤清冴主将（2年）。5打数5安打、うち適時打4本で5打点とチームを引っ張った。18安打のうち短打が16本を占めたのも、「低い打球で守備の間を抜く」と打線が意識統一した結果だ。

西南中（花巻）時代、県選抜の主将を務めた佐藤主将は「私立を倒して甲子園に行く」ため地元の花北青雲に入学。その夢へ一歩近づいた。

23年前、宮古の主将としてセンバツに出場した沢田監督は「私のころより強い。甲子園はそんなに遠い場所じゃないかもしれない」とつぶやいた。